

〈玉鬘〉と『源氏物語』

—「二本の杉」に現る玉鬘をめぐって—

倉持長子*

一、はじめに——能〈玉鬘〉と『源氏物語』の関わり——

能〈玉鬘⁽¹⁾〉は、作者金春禪竹が『源氏物語』を深く読みこんで作ったといわれる。松岡心平氏は、〈玉鬘〉のみならず、〈楊貴妃〉や〈小督〉〈野宮〉といった禅竹作品が『源氏物語』本文に周到に目配りした結果、生み出されたものであることを明らかにしてきた。石黒吉次郎氏も、〈玉鬘〉では、『源氏物語』の梗概書や連歌寄合にとられることなく、より本質的に原典となる『源氏物語』の和歌が引用されていると指摘する。能〈玉鬘〉における『源氏物語』の取り込みについて、疑念を挟む余地はなさそうである⁽⁴⁾。

とはいえ、能〈玉鬘〉では『源氏物語』そのままの世界が展開されるわけではない。まず、新潮日本古典集成『謡曲集』中の〈玉鬘〉解題が

述べるように、能の前場では、『源氏物語』玉鬘巻と異なり、初瀬の地を「紅葉」が彩っている。これは、『連珠合璧集』の「紅トアラバ：紅葉」、また『光源氏一部連歌寄合之事』に「きぬくばり」として「玉鬘」の紅の色深くなどといふ事」とある連歌寄合を背景としている。〈玉鬘〉では、中世の連歌寄合の知識に基づく前場の紅葉、そして後場に畳みかけるように現れる玉鬘の黒髪という鮮烈な配色によって、激しい恋の妄執が描写されている。

さて、〈玉鬘〉において最も注目されてきた問題は、一曲の主題であろう。日本古典文学大系『謡曲集』下の〈玉鬘〉解説が述べるように、後シテ玉鬘が爆発させる「迷い」「業因」「妄執」が何に由来するのかわかせることは難しい。先行研究では、『源氏物語』に加えて藤原定家の和歌を重ねあわせる禅竹の手法が明らかにされ、その妄執の正体に迫ろうとする試みが行われてきた。徳江元正氏・宮田和美氏⁽⁵⁾によれば、後場「一セイ」の「われや恋ふらし面影の、立つや……」⁽⁶⁾という表現は、定家『拾遺愚草』の「くるゝ夜は面影見えて玉鬘ならぬ恋する我ぞ悲しき」⁽⁷⁾（二三七六）、さらにその注「ならぬこひとは、成就せぬと云事なり。わが物にならぬよし也。面かげのみみえてならぬ恋ゆへくづおるゝさま也」⁽⁸⁾（『拾遺愚草抄書』）を踏まえたもので、シテ玉鬘の妄執の正体は「ならぬ恋」にあるという。橋本博夫氏は、さらに『新古今和歌集』の定家詠「かきやりしその黒髪の筋ごとのうち臥す程は面影に立つ」（恋歌・五）を〈玉鬘〉作能の背景として挙げ、禅竹は、玉鬘のみならず「黒髪」を「かきやりし」⁽⁹⁾人すなわち光源氏の執心までをも重層的に描き出したと指摘している。〈玉鬘〉では、他にも、「カケリ」後の「一セイ」⁽¹⁰⁾「永き闇路や黒髪の」「長き夢路は覚めにけり」に「黒髪のながき闇路も明けぬらん置迷ふ霜の消ゆる朝日に」（『拾遺愚草』二七七〇）、ま

た「キリ」「秋の葉の身も、朽ち果てね恨めしや。恨みは人をも世をも、思ひ思はじただ身ひとつの」に「身を知れば人をも世をも恨みねど朽ちに袖の乾く日ぞなき」(『拾遺愚草』一七二四)など、定家作歌を引用することで、『源氏物語』には見えなかった、シテ玉鬘の激しく狂乱する様子が描き出されている⁹⁾。

本稿では、こうした〈玉鬘〉と『源氏物語』の重なり・異なりをふまえてつ、〈玉鬘〉の舞台「二本の杉」に注目してみたい。『源氏物語』玉鬘巻では、右近と玉鬘一行の出会いの場は「椿市」であるが、〈玉鬘〉では「二本の杉の立ち所」に設定されており、シテ玉鬘が狂乱を見せるのもこの場とされている。この舞台のずれについては、従来あまり注目されてこなかったが、〈玉鬘〉で「二本の杉の立ち所」が舞台とされたことは、実は後シテ玉鬘の像造型にまで深く関わる問題ではないだろうか。以下、考察していくことにする。

二、『源氏物語』における「二本の杉」

『源氏物語』玉鬘巻では、美しく成人した玉鬘が強引な求婚者大夫監から逃れて筑紫を脱出したものの、都で窮迫してしまい、乳母子豊後介の助言で石清水八幡宮、さらに長谷寺に参詣することになる。長谷寺は「仏の御中には、初瀬なむ、日本の中にはあらたなる験あらはしたまふと、唐土にだに聞こえあむなり」(③一〇四頁)といわれる霊験あらたかな寺である。この長谷寺に赴く手前、「椿市といふ所」にて、玉鬘は母夕顔の乳母子右近の一行と邂逅する。右近は、「年月にそへて、はしたなきまじらひのつきなくなりゆく身を思ひ悩みて、この御寺にたびたび詣でける」(同一〇六頁)といわれており、彼女の初瀬参詣は数回に

及ぶものであったことがわかる。長谷寺の御堂では、「右近が局は、仏の右の方に近き間にしたり」(同一〇頁)とあり、礼拝に不便な場にいた玉鬘一行を自分の局に呼び寄せ、参籠にも慣れた様子を見せていた。また、参籠時の右近の心中は「この人をいかで尋ねきこえむと申しわたりつるに、かつがつかくて見たてまつれば、今は思ひのごと。大臣の君の尋ねたてまつらむの御心ざし深かめるに、知らせたてまつりて、幸ひあらせたまつりたまへ」(同一二頁)とある。長きにわたって玉鬘を求めており、玉鬘を得たいという深い気持を抱く光源氏にその所在を知らせ、「幸ひ」がもたらされるように、と祈っている。知り合いの大徳にも、玉鬘を「見たてまつり出でたる」ことの願果たしを行う、と約束している。長谷寺での充実した参籠を終えた右近は、初瀬川に面した大徳の宿坊で玉鬘とはじめて対面し、次のように歌を詠み合った。

右近、

「ふたもとの杉のたちどをたづねずはふる川のべに君をみましや

うれしき瀬にも」と聞こゆ。

(玉鬘) 初瀬川はやくのことは知らねども今日の逢ふ瀬に身さへながれぬ

とうち泣きておはするさま、いとめやすし。(③玉鬘一一六頁) 右近は、『古今和歌集』雑躰・旋頭歌の「初瀬河古川の辺に二本ある杉年を経てまたもあひ見む二本ある杉」¹⁰⁾、また『古今和歌六帖』三「祈りつゝ頼みぞ渡る初瀬川うれしき瀬にもながれあふやと」をふまえ、「ふたもとの杉のたちど」を訪ねたことがきっかけとなり、その霊験で玉鬘に会えたのだ、という喜びを詠んでいる。この「ふたもとの杉」は、いわば初瀬という地の換喩であり、会いたいと願う人に再会できる場という意味が込められている。ただし、物語において、玉鬘も右近も実際の

「ふたもとの杉のたちど」に立ち寄ったという記述は見られない。玉鬘をめぐり、こののち「ふたもとの杉」について言及されることもない。

むしろ、『源氏物語』で右近と玉鬘が邂逅した舞台として注目されるのは、「椿市」であろう。豊後介の助言を受けて、「ことさらに徒歩」で難儀しつつ長谷寺へ向かった玉鬘は、ひたすらに「親」に会いたい一心で長谷寺への中継地点、「椿市」にたどり着いた。

……かくさし当たりて、身のわりなきままに、とり返しいみじくおぼえつつ、からうじて椿市といふ所に、四日といふ巳の刻ばかりに、生ける心地もせで行き着きたまへり。

③玉鬘一〇四〜一〇五頁

三輪山西麓と長谷寺の間に位置する「椿市」は、長谷寺参詣者たちが必ずと言ってよいほど立ち寄る場であった。『枕草子』⁽¹³⁾には「市はたつの市。さとの市。つば市。大和にあまたある中に、長谷に詣づる人かならずそこにとまるは、観音の縁のあるにやと、心ことなり」とあり、観音の霊験が及ぶ場とされている。『蜻蛉日記』⁽¹⁴⁾における道綱母の二度にわたる初瀬参詣でも、「今日も寺めく所にとまりて、又の日は、椿市といふ所にとまる」「かへりごとには『椿市といふところまでは、たひらかにむ』と書きつ」「からうして、椿市にいたりて、例のごと、とかくして出で立つほどに、日も暮れはてぬ」とあり、初瀬への参詣者が供物を始めとする準備を整えるための重要な宿泊地であった。『源氏物語』の玉鬘もここで疲弊した体を休め、初瀬参籠で神仏に供える灯明などを用意をしている。

歩むともなく、とかくつくるひたれど、足の裏動かれずわびしければ、せん方なくて休みたまふ。この頼もし人なる介、弓矢持ちたる人二人、さては下なる者、童など三四人、女ばらあるかぎり三人、

壺装束して、樋洗めく者、ふるき下衆女二人ばかりとぞある。いとかすかに忍びたり。大御灯明のことなど、ここにてし加へなどするほどに日暮れぬ。

③玉鬘一〇五頁

ただし、『源氏物語』における「椿市」はただ長谷寺への經由地、という意味のみを負うのではない。金秀美氏は「椿市」が「人が物が集い、語りが交差する」「説話の中で何かの事件が起きる」「市」という特殊空間であることに着目する。説話における「市」は霊験の起きる場であり、「元」の持主が失ったものを発見し、取り戻す場、「交換」「取引」の場である。玉鬘をめぐっては、次のような「《市》の要素」も見えていた。

・九条に、昔知れりける人の残りたりけるをとぶらひ出でて、その宿を占めおきて、都の内といへど、はかばかしき人の住みたるわたりにもあらず、あやしき市女、商人の中にて、いぶせく世の中を思ひつつ、秋にもなりゆくまに、来し方行く先悲しきこと多かり。

③玉鬘一〇二頁

・京はおのづから広き所なれば、市女などやうのもの、いとよく求めつつ率て来。その人の御子などは知らせざりけり。

(同一二七頁)

一つ目は、上京したばかりの玉鬘が、昔のつてを頼って身を寄せた九条の宿で、「女の商人」の中に混じるような環境の中、心細く過ごしている場面である。二つ目は、「異なる所を媒介し、情報を持ち込む役割」を担う「市女」が、六条院入りを控えた玉鬘の女房の選別に一役買ったことを示す場面である。

こうした「市」の属性を投影させながら、光源氏の「失ったもの」としての玉鬘は、自らの意思とは関わりなく「《空間移動》」を続け、「《取

引されるもの《商品》》として「椿市」において発見され、六条院入りを果たしていくことになるという。

能《玉鬘》においても、「クセ」でシテが「唐土船」によって筑紫を脱出し、船旅を終えても「都の内」でなお「浮きたる舟の上」「水鳥の陸に惑へるこち」「たづきも知らぬ身の程」といった不安定な状況に悩んで長谷寺に詣でたことが語られており、『源氏物語』が描いた、所謂「空間移動」する玉鬘の姿が確かに反映されている。しかし、上京から長谷寺への道行については、「あしびきの 大和路や、唐土までも聞こゆなる、初瀬の寺に詣でつつ」とあり、「椿市」という場は完全に削ぎ落とされている。同時に、「《商品》」として六条院の光源氏のもとへ返される玉鬘のイメージはどこにも描かれていない。

三、能《玉鬘》の「二本の杉」

一方の能《玉鬘》では、右近の歌に詠まれたまさに「二本の杉」のもとで、物語が展開する。前シテ里女は諸国一見の僧（ワキ）を「二本の杉」のもとへと誘い、この場に深い縁のある玉鬘を弔うように、と頼む。少々長くなるが、本文を引用したい。

〔歌〕かくてみ堂に参りつつ かくてみ堂に参りつつ、補陀落山も目のあたり、四方の眺めも妙なるや、紅葉の色に常盤木の、二本の杉に 着きにけり、二本の杉に 着きにけり

〔問答〕シテ「これこそ二本の杉にて候へよくよくおん眺め候へワキ」さてはこれなるが二本の杉にて候ひけるかや、古き歌に、二本の杉の立ち処を尋ねずは、古川のべに君を見ましやとは、なにと詠まれたる歌にて候ふぞ シテ「これはいにしへ 玉葛の内侍、初

瀬詣でに右近とかや見奉りて詠ぜし歌なり、共にあはれと思しめし
て弔ひ給ひ候へ。

紅葉で色付く初瀬山の中であって、青々とした「常盤木の、二本の杉」が印象的に刻まれる。シテは『源氏物語』玉鬘巻の右近詠「二本の杉の立ち処を尋ねずは古川野辺に君を見ましや」を引き、玉鬘が長谷寺を参詣した際に右近が眺めて詠んだ歌である、と説明し、右近ともども弔問するようワキ僧に依頼している。

また、この古歌の由来を尋ねられたシテは、玉鬘が筑紫から逃れたこと、漂泊の身で困窮していたことなどを語りつつ、再び「二本の杉」について言及する。

〔クセ〕…あしびきの大和路や、唐土までも 聞こゆなる、初瀬の寺に 詣でつつ。シテ「年も経ぬ、祈る契りや 初瀬山、「尾の上の鐘のよそにのみ、思ひ絶えにし いにしへの、人にふたたび
二本の、杉の立ち所を 尋ねずは、古川のべと 詠めける、今日の逢瀬も 同じ身を、思へば法の 衣の、玉ならば 玉鬘、迷ひを照らし給へや。

かつての右近と同様に、この「二本の、杉の立ち処」を尋ねた縁で、お僧と「今日の逢瀬」を果たしたことを述べ、「迷ひ」を取り除くよう、再び依頼している。シテにとって、この「二本の杉」は「よそにのみ、思ひ絶えにしいにしへの、人」である右近との再会のあると同時に、「迷ひ」という、玉鬘の何かしらの迷妄が息づく場とされている。

なぜ、《玉鬘》では「椿市」ではなく、「二本の杉」が舞台とされているのだろうか。ここでは二つの理由について考えてみたい。

第一には、『源氏物語』受容の世界において、「椿市」が玉鬘に縁の深い場として特に注目されていないことが推測される。以下、中世におい

て玉鬘の初瀬参詣がどのように捉えられ、表現されているかを考察してみたい。

能にも多大な影響を与えたと言われる早歌では、玉鬘の筑紫上りから初瀬参詣までを次のように描いている。

……船は湊にいりあひの 鐘のみさきの興津浪 かけてかへりし玉
かつら 心づくしにさすらひて はたちばかりになら山や こえ行
すゑの市路より はつせ詣のあいやどり むかしの人を見しことは
うつつを夢とやたどりけん……⁽¹⁶⁾ (頒巾振恋)

ここでは、「こえ行すゑの市路より」とはあるものの、「樅市」という具體的な場の名称は登場しない。

古注釈にも目を向けてみよう。特に注目したいのは、一条兼良の注釈『花鳥余情』である。金春禅竹『六輪一露之記』第二章には「一条関白兼良外書論」と見え、また一条兼良が禅竹の息子宗筠に宛てた「桃華老人申楽考証記」⁽¹⁷⁾には、兼良が禅竹のために『狭衣物語』の能を作り、禅竹が節・型を付けたとの記録がある。禅竹と兼良には深い交流があったことが認められることになる。この兼良の『花鳥余情』では、『小右記』正暦三年(九九二)三月の初瀬参詣の記事を引き、「今案はつせへまいる人はつはいちにいたりて御あかしの事などを用意する事⁽¹⁸⁾」と注を付けている。ただし、ここでの「樅市」は、右近と玉鬘一行が感動の再会を果たした地、初瀬観音の霊験が働く地としては特に捉えられておらず、単なる初瀬参詣のための準備の地としての意味しか見出されていない。管見によれば、諸注において右近と玉鬘一行の出会いが「樅市」で起きたことを記すのは『源氏物語提要』⁽²⁰⁾のみであった。なお、〈玉鬘〉成立より後の注釈となる『細流抄』では「つはいち」と立項して「長谷寺あたりとみゆ当時俗にたんは市といへり此所敷⁽²¹⁾」とのみ注を付し、場所も

不明とされている。

続いて『源氏小鏡』⁽²²⁾の諸本も見てみよう。第一系統(古本系)第四類国会図書館本(古活字版)では、右近と玉鬘の邂逅について、「かくて、右近、はつせにて行あひ」とあり、第二系統神戸親和女子大学本(無刊記整版)も、「かくてのほり、はせにて右近参りあひ」と簡単に述べるのみである。第二類国文学研究資料館本(道安系統)の「玉鬘」も、次のように記している。

かくて京へ上りても、知る方なく、大臣にも、いまだ申さず。又、源氏の大臣も、知り給はずして、魚の、陸に上がり、鳥の、巢を離れたるやうに、悲しくて、仏の御しるべをたのみたてまつりて、初瀬へ、徒歩にて参り給ふに、かの右近といひし女房も初瀬へ参りけるが、見あひたてまつりて、互ひに喜び給ふ。その時、右近歌、

二もとの杉のたちどをたづねずはふる川のべに君を見ましや
……

この『源氏小鏡』では、「樅市」という言葉はすっぽり抜けており、右近と玉鬘はあたかも長谷寺で出会ったかのように語られている。ほか、すべての『源氏小鏡』諸本において、「樅市」の語を見出すことはできなかった。

参考までに、寛永九年(一六三二)本の〈玉鬘〉間狂言を見ておくと、「乳母申され候ふは筑紫にて初瀬へおん参りなされうずるとのご立願を立て申し候ふ間直に初瀬へおん参りあれとて当寺へおん供申され候。その時右近と申す人これは玉鬘内侍に今一度御逢ひ給ひて喜び給ふこと限りなし。その時右近のおん歌に 二本の杉の立ち処を尋ねずは古川野辺に君を見ましやと詠み給ひて それより都へおん供申し髭黒の大臣の北の方になり給ひたると申し候」とあり、「樅市」は抜けている。

以上の現象をふまえると、『源氏物語』受容の世界において、「椿市」は脱落し、玉鬘と右近の邂逅については右近詠の「二本の杉」をめぐる物語として捉えられていると考えられよう。

第二には、〈玉鬘〉における「二本の杉」に込められた「恋」のありようの問題があるからと考えられる。先にも見たように、『源氏物語』の右近詠は、『古今和歌集』巻十九・雑躰・旋頭歌、

初瀬河古川の辺に二本ある杉 年を経てまたもあひ見む二本ある杉 (二〇〇九)

を踏まえている。『源氏物語』の右近詠も含め、多くの和歌における「二本の杉」は、次に挙げたように、初瀬観音がもたらす靈験をふまえ、思ひ人との《再会》という意味で恋歌に詠み込まれるものである。

こひわびぬ又とはいはじひとたびもせめてあひみんふたもとの杉
 『延文百首』「寄杉恋」・二三七九⁽²⁴⁾
 はつせ河又あひみんとたのめてししるしもいづら二もとの杉

『公賢集』「寄杉恋」・八二二

「二本の杉」に込められた《再会》への願いは、「ひとたびもせめてあひみん」や「又あひみんとたのめてし」とあるように、祈りにも似た、非常に切実なものである。『源氏物語提要』玉鬘巻には、「此川のはたに杉有、こひする人まいりて祈る処なり」との注記も見える。つまり、「二本の杉」は、強い恋情に囚われた者が訪れる場と考えられよう。〈玉鬘〉の後シテ玉鬘もまた、「恋する玉鬘⁽²⁵⁾」として登場すると言われる。能〈玉鬘〉では、愛しい人との《再会》という意味は弱まっているものの、「恋ひわたる、身はそれならで玉葛」「玉葛の、乱るる」「われや恋ふらし」「焦がるるや 身より出づる、魂と見るまで 包めども」とある。「二本の杉」は、このように恋の妄執に身を焦がし、狂乱する後シテ玉

鬘が登場するのにふさわしい舞台として意味を持つのではないか。

ここで、和歌の世界における「二本の杉」は、ただ《再会》をもたらす場としての意味を持つにとどまらないことにも注意しておきたい。禅竹在世期とほぼ同時代に成立した勅撰和歌集中の「二本の杉」には、次のような例も見える。

・『新葉和歌集』巻十三・恋歌三

たのまめや又あひみんとちぎるとも人の心二本の杉

(八五五・東宮大夫師兼)

・『新統古今和歌集』巻十四・恋歌四「百首歌たてまつりし時」

つれなくてまたもあひみぬ契さへうき名にたてる二本の杉

(一四〇九・中山定親)

二つの歌とも、『再会』に加えて、もう一つの意味を「二本の杉」に負わせていることが注目される。一つ目の歌は、「二本の杉」の「ふた」という音から「ふたごころ」を導き、次の逢瀬を固く誓ったとしても、人の浮気な心を信じることができようか、という意味になっている。二つ目の歌は、「二本の杉」が「立つ」ことから「憂き(浮き)名が立つ」を導き、恋の評判が立てられることの辛さを詠んでいる。こうした「二本の杉」によって表現される恋の「二心」「うき名」は、〈玉鬘〉の後シテ玉鬘の様相にも反映しているのではないだろうか。

まず、後シテの「二心」について考えてみよう。後シテは、「ワカ」「セイ」で「つくも髪」「つくも髪、われや恋ふらし」「面影の、立つ」と謡い、「カケリ」で乱れる心を表している。この「つくも髪」の部分は、『伊勢物語』六十三段の「百年に一年たらぬつくも髪われを恋ふらしおもかげに見ゆ⁽²⁷⁾」を踏まえたものである。この歌を詠んだのは「世につける女」、すなわち恋心にとりつかれた好色の女であった。

また、「(キリ)」で語られる「あるひは湧きかへり、岩洩る水の思ひに咽び、あるひは焦がるるや身より出づる、魂と見るまで包めども、螢に乱れつる、影も由なや恥ずかしや」についても注意すべきであろう。当該場面をめぐっては、玉鬘が柏木を兄弟とは知らないとして、二人の「危険な恋の行方」を仄めかす中世の『源氏物語』解釈や、『源氏物語』本文が伝える光源氏の好色な企みによって蛭兵部卿宮の前に官能的な美貌を晒すというスキャンダラス性を踏まえて、「恋多き女」としての玉鬘像を提示するものという樹下好美²⁸氏の指摘も思い出されるところである。

さらには、『源氏物語』の「二本の杉」が、浮舟をめぐって姿を見せていたことも、能〈玉鬘〉における「恋多き女」としての玉鬘像の造型に関わっていると考えられよう。手習巻において、娘を亡くした横川の僧都の妹尼は、初瀬参詣帰りに見つけた浮舟を「初瀬の観音の賜へる人」(⑥手習二九三頁)、「観音の御験」(同三二三頁)と捉え、初瀬観音が最も靈験あらたかな仏であることを理由に浮舟を初瀬参りに誘う。しかし、浮舟は固く拒み、次のように詠んだ。

はかなくて世にふる川のうき瀬にはたづねもゆかじ二本の杉

(⑥手習三二四頁)

この「二本の杉」について古注釈を見ると、前掲の兼良『花鳥余情』の「二本の杉」のように解釈を付していることが注目される。

二もとの杉にはほふ宮かほる大將のふたりを思出給ふにや又もあひみんといふ歌によりてあまきみのたはふれ事にいひあてたるへしの中にこの解釈は『岷江入楚』の引く三条西実枝説によって「此説はあまりなる歎」と疑問視され、中院通勝によって「二本の杉は泊瀬の事とはかり大やうに見て可然歎」と否定されて以降、古注釈では取り上げら

れなくなっていく。ただし、先述したように、禅竹と兼良に親交があったことを考慮するならば、手習巻における浮舟詠の「二本の杉」を〈二人の男性〉との恋と捉える解釈が、能〈玉鬘〉に持ちこまれている可能性もあるのではないか。〈玉鬘〉が描こうとする「恋多き女」のシテ像は、実は「二本の杉」が放つ強烈な恋のイメージ、さらには「二本の杉」から連想される「二心」によって重層的に支えられているのではないだろうか。

また、先の『新統古今和歌集』定親歌において「二本の杉」と合わせて詠まれていた「うき名にたつ」については、次の〈玉鬘〉「(キリ)」の詞章に注意しておきたい。

恨みは 人をも世をも、思ひ思はじ ただ身ひとつの、報ひの罪
や 数かずの、憂き名に立ちしを 懺悔の有様、……

シテは、「二本の杉」のもとで、「数かずの、憂き名に立ちし」罪業を「懺悔」する姿を見せるのである。

「二本の杉」は、まずは恋する女として、そして光源氏をはじめとする数々の男君たちとの恋に生きる二心を持つ女として、さらには「数かずの、憂き名」を立てた女としてのシテ玉鬘の像を規定する場に相応しく、〈玉鬘〉の舞台として選ばれているように思われる。

四、おわりに

『源氏物語』の玉鬘と右近がはじめて行き会った地「椿市」は、中世においてはあまり注目されることがなかった。二人の出会いには、『再会』をもたらしとされた地「二本の杉」を舞台として果たされたかのように捉えられてきたのである。まずは、こうした中世的な理解を経て、〈玉

《鬢》でも「二本の杉」が舞台とされていると考えられよう。また、伝統的な和歌の世界において、「二本の杉」に集う者は切実な恋慕を抱く者とされていた。さらに、「二本の杉」を詠み込んだ歌は、「二心」や「うき名に立つ」といった、スキャンダラス性に満ちた恋をも暗示する。こうした「二本の杉」から引き出されるイメージ、さらには『源氏物語』で三角関係に揺れた浮舟のイメージをも伴って、能《玉鬢》が独自に放つ「恋多き女」としてのシテ玉鬢像は立ち現れてくるのではないだろうか。

註

- (1) 曲名については、現行観世流の表記に従った。
- (2) 松岡心平氏『源氏物語』を讀む金春禪竹』『ZEMMI——中世の芸術と文化』三卷（森話社、二〇〇五年十月）、「玉鬢——二本の杉」『物語の舞台を歩く——能 大和の世界』（山川出版社、二〇一一年）。
- (3) 石黒吉次郎氏『源氏物語』と中世芸能』講座源氏物語研究 第四卷 鎌倉・室町時代の源氏物語（おうふう、二〇〇七年）。ほか、三角洋一氏「作品研究 玉鬢」『観世』五五—七（一九八八年七月）も、禪竹が直接『源氏物語』を讀んでいたとする。
- (4) 《玉鬢》後場において畳み掛けられる「鬢」の表現に注目し、『源氏物語』における玉鬢の「黒髪」の重要性を参照させた河添房江氏「髪のエロティシズム」『性と文化の源氏物語——書く女の誕生』（筑摩書房、一九九八年）もある。
- (5) 徳江元正氏・宮田和美氏「謡曲雑稿 玉鬢」「金剛」一一九号（一九八四年一月）。
- (6) 《玉鬢》の本文は、日本古典文学大系『謡曲集』下（岩波書店、一九六三年）による。
- (7) 橋本博夫氏「源氏見ぬ大夫」『橋本博夫謡曲論文・隨筆遺稿集』（二〇〇〇年八月）。
- (8) 注2松岡氏（二〇一）はこの見解を受けて、同じく金春禪竹作《定家》でも、式子内親王と定家の「互いの苦しみはなれやらす、ともに邪淫の妄執」に悩む恋の世界が描かれていることを指摘した。
- (9) ほか、三宅晶子氏「禪竹の歌語意識」『歌舞能の確立と展開』（ペリカン社、二〇〇一年）は、《玉鬢》の「綱手悲しき類ひかな」には「新勅撰集」羈旅・実朝の「世の中は常にもがもな落こぐ海人の小舟の綱手悲しも」の世界が取り込まれ、『源氏物語』

とは離れた恋の世界に翻弄される「恋の女」の身が表現されていると論じる。
 (10) 注2松岡氏（二〇一）は、『源氏物語』では「二本の杉が右近・玉鬢邂逅の地になっていないことについて触れているが、『能』の『玉鬢』では二本の杉が強調されている」と指摘するにとどまる。

- (11) 『源氏物語』の本文は、新編日本古典文学全集（小学館、一九九六—一九九八年）による。
- (12) 『古今和歌集』の本文は、新編日本古典文学全集（小学館、一九九四年）による。
- (13) 『枕草子』の本文は、新編日本古典文学全集（小学館、一九九七年）による。
- (14) 『蜻蛉日記』の本文は、新編日本古典文学全集（小学館、一九九五年）による。
- (15) 金秀美氏「玉鬢物語における『九条』と『樺市』——『市』を巡る説話との関わりから」『中古文学』一一号（二〇〇四年五月）。
- (16) 外村南都子氏「能の世界と『源氏物語』『早歌の心情と表現——中世を開拓する歌謡』（三弥井書店、二〇〇五年）、引用は外村久江氏・南都子氏『早歌全詞集』（三弥井書店、一九九三年）による。
- (17) 『金春十七部集』（春陽堂、一九三二年）所収。
- (18) ただし、焼失により、その能は現存しない。
- (19) 本文は、『松永本 花鳥余情』（桜楓社、一九七八年）による。傍線部は筆者。
- (20) 稲賀敬二編『源氏物語提要』（桜楓社、一九七八年）。
- (21) 本文は、『内閣文庫本 細流抄』（桜楓社、一九八〇年）による。
- (22) 岩坪健氏『源氏小鏡』諸本集成（和泉書院、二〇〇五年）を参照した。ただし、私に表記を改めたところがある。
- (23) 新潮日本古典集成『謡曲集』中（新潮社、一九八六年）を参照した。
- (24) 以下の和歌の本文は、新編国歌大観による。
- (25) 注2松岡氏（二〇一）。
- (26) ワキ僧に弔問を頼む際には、「人にふたたび二本の、杉の立ち所を尋ねずは、古川のとと詠めける、けふの逢ふ瀬も同じ身を、思へば法の衣の、玉ならば玉葛」とあり、「二本の杉」の《再会》という意味が反映されている。
- (27) 『伊勢物語』の本文は、新編日本古典文学全集（小学館、一九九四年）による。
- (28) 樹下好美氏「《玉鬢》の構想——《浮船》の影響と源氏物語享受をめぐる——」『能 研究と評論』（一九九三年十二月）。